

漢

字

(非賣品)

811. 2 K0518 k

讀書百通
字義自ら通

漢字

小金澤久吉述

漢字是非の議論も久いものでありますが、其れは漢字其物の悪いのではなくつて、漢字の教へ方や字引が、世の中の進歩に伴はなかつた所から起る議論では御座りますまいか、從來漢字の教へ方は讀書百通義自ら通すと云ふ流義でありまして、然もそれで教師も生徒も満足して居りましたのです、實に悠長な教へ方と云はねばなりません、が、併し日進月歩の今日の世の中は最早、其様な悠長な事は時間が許さなくなつたものですから、成べく簡易の方法を以て覚え様と云ふ風になつて参りましたので、其の結果、教へ方の不便を攻むると同時に漢字其物までを排斥することになりましたので、漢字は云はゞと

字引の不
進歩

二

記憶し悪
い缺點

四書五經
六書の
轉倒は大
間違

急務は字
引の改造
と教へ方
の革新

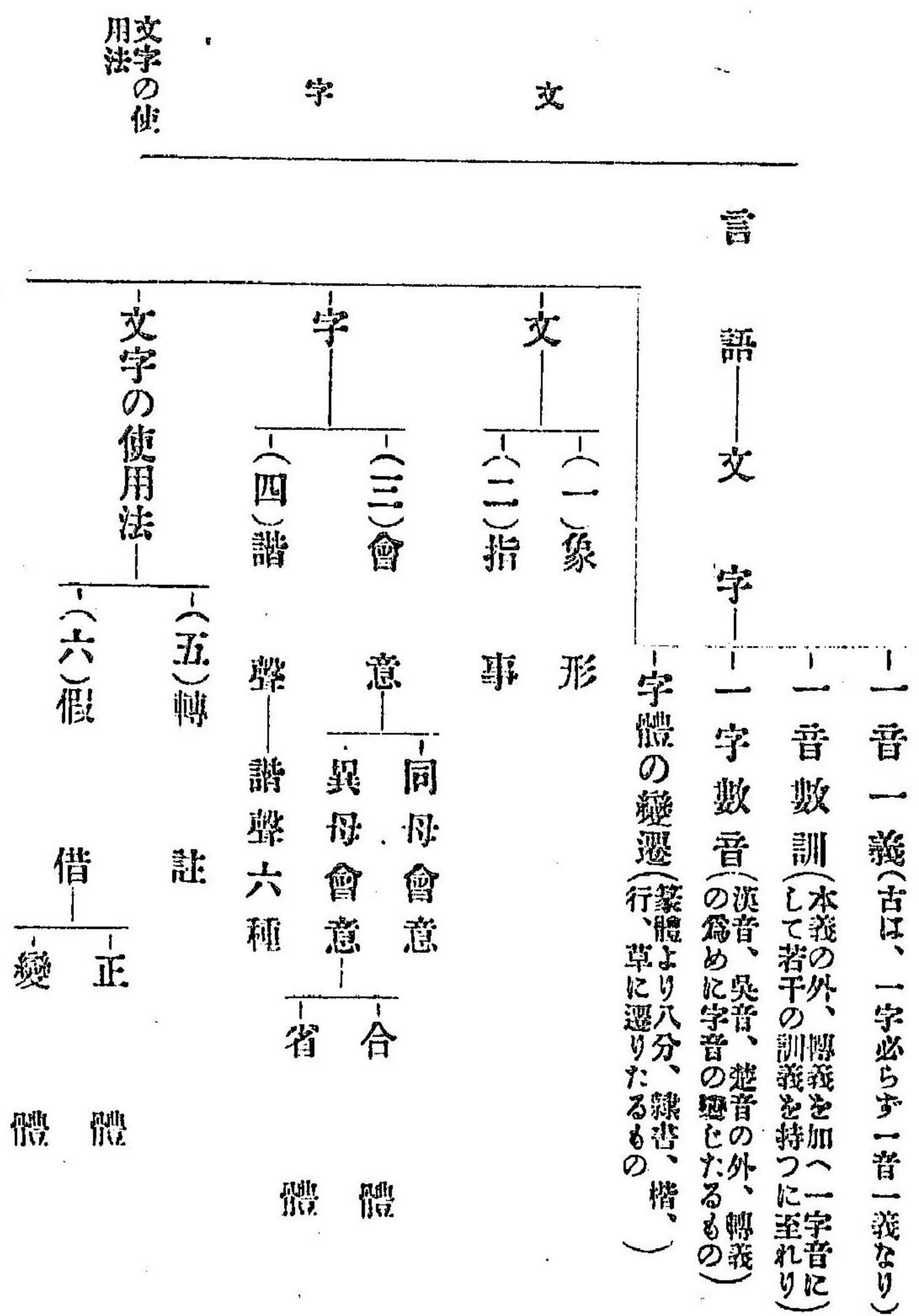
んでもない傍杖を喰つたのです。又、字引の組立方がこれが亦實に遅々としていや一向進歩しない所謂字彙體なるものが今日もまだ用ひられて居るのですから困ります。此の字彙體と申しまするのは索引(字を引く見出のこと)の便を主として組立つたものですから、いくら讀んでも記憶し悪いと云ふのが何よりの缺點であります。其の次には從來の教へ方がこれが亦困りもので、御承知の通り四書五經を先にして六書象形指事會意諧聲轉註假借と云ふて文字の成立を述べたるものを後にして居るのですから、それが大間違ひです。初め六書で一通り文字の義理を呑み込んでそれから書物を讀めば何の事はないのです。それこそは論語讀みの論語知らずなんと云ふ片輪者が出來様筈がないので、無論今日の如き非難などが起る譯がない、それですから今日の急務は字引の改造と教へ方の革新とが第一で、

言語の後
に文字生
る

六書

成べく簡易の方法を以て漢字を教へ得べき道を攻究することが、尤必要のことでありませう。知れ切つた事を、くどく述べる様であります。事の順序として、ト話が前に溯りますが、一體人類が社會を形づくと同時に一種の言語が出來、其れを互に交通し様とか、若くは書き綴つて後世に傳へ様とか云ふ希望から、勢、文字の必要が起つて、そこで始めて文字が作られたのであります。支那で創めて篆體文字(篆書のこと)の作られたのは、今より五千年以前のことですが、無論一時に出來たものではなくつて、追々に殖えたのであります。後から之を分類して分り易くしたのが、即ち六書であります。圖を以て其の大系を示せば斯様になります。

三



- 象形
- (一) 象形とは形體を摸擬して作りたるもの(子(鳥)鳥)等の如き文、是なり
- 指事
- (二) 指事とは象形を基として事物の性質を表示したるもの(一、二、三、上、下)等の如き文、是なり
- 會意
- (三) 會意とは文と文とを結合して一個の字義を作りたるもの(森、赫)の類は同母會意にして外(遠る)なりトは平旦を尙とぶ今若し夕に事を卜すれば外(鼠)匿なり鼠、穴中に在るに従ふ)の類は異母會意なり共に皆合體なり省體とは孝子に従ひ老の者に従ふ)勞力に従ひ熒の省に従ふ)等の如き字、是なり
- 諧聲
- (四) 諧聲とは文と字若くは字と字とを合して一字となしたるものにして其一半は意義を含み他の一半は音聲を見はすもの(江(水)に従ふ工の聲)草(艸)に従ふ早の聲)等の如き字、是なり

(五) 轉註とは言語ありて文字足らざる場合、既成の文字に就きて其意義の轉註すべきものを求め、其文字を借りて其言語に代用したるものなり。音樂の樂が人心を娛ましむるが故に其義轉註して悅樂の樂に轉じたるが如き又、尺度の度が測ると云ふ義より付度の度に轉じたるが如き是なり。

(六) 假借とは已に言語音聲あれども未だ正當の文字なき場合其の音聲に符合する所の文字を無意義に借用するを云ふ。竹節の節を節操の節に假借し、皮革の革を更革の革に假借したるが如きを云ふ。皆假借の正體なり。婁君を細君に作り、原被兩曹を兩造に作るが如きは假借の變體なり。

六書の大體は先づこんなものです。此の中象形、指事この二つを文と云ひ、會意、諧聲この二つを字と云ふて居りまして、古は文と字とを此

の様に劃然と區別してありましたのを、後世、文と字との區別を忘れて一緒にして仕舞つたから、文字と云ふ言葉の譯が分らなくなり、また、勿論、古代は言語を表示するための文字でありましたから、音、直ちに義を顯して居りましたが、今日でも其型が少しは残つて居ります。試に一二の例を挙げますれば、

菊、天、地、金、銀、朱、德、灣、仁、禮、

と云ふ様な工合に、古は一字必ず一音一義でありました。但し言語の殖える割合に文字が殖えないから、轉註、假借と云つて、餘儀なく一字に若干の訓義を持たせて之を轉義と云ふて用ひたので、中世よりは本義(最古の字義)は忘れられて轉義のみ流行して居る文字もあります。又他の一方には音韻(古文の音調のこと)及び四聲(平聲、上聲、去聲、入聲)并に漢音、吳音、楚音等の變遷がありましたけれども、本義は依然

として動きません、恰も萬世不易でありましたから、今日でも五千年の昔に溯つて文字の本義を考ふれば明瞭に分ります。

本義と轉義との實例

様 <small>シヨウ</small>	榭 <small>シヤ</small>	蟹 <small>シヤ</small>	也 <small>エヤ</small>	豆 <small>トウ</small>	雖 <small>スヒ</small>	焉 <small>エン</small>	強 <small>キヤウ</small>	自 <small>ジ</small>	榮 <small>エイ</small>
榭實 <small>シヤク</small> なり	蟹 <small>シヤ</small> の醜 <small>シヤク</small> なり	女の陰 <small>シヤク</small> なり	肉 <small>ニク</small> を食 <small>ク</small> ふ器	蜥蜴 <small>シヤク</small> に似て大なる虫なり	黄色 <small>キヤウ</small> なる鳶 <small>トウ</small>	斬 <small>ツ</small> なり	鼻 <small>ビ</small> ナリ	桐 <small>キ</small> なり	
サマ、カタチ、	コヤクニン、	ナリ、ヤ、	マメ、	イヘドモ、	イヅクンゾ、	ツヨシ、	ヨリ、ヲノヅカラ、ミヅカラ、	サカエ、	

本義

轉義

字音變ずることも本義の動かざるは漢字の特色

耐 <small>ナイ</small>	昔 <small>シヤク</small>	離 <small>ライ</small>	萬 <small>マン</small>	難 <small>ナン</small>	稱 <small>シヨウ</small>
罪 <small>サイ</small> の髡 <small>カミ</small> に至らざるなり	乾肉 <small>カンニク</small> なり	倉庚 <small>ソウケイ</small> なり	蜂 <small>ハチ</small> の異名なり	鳥 <small>トリ</small> の名なり	銓 <small>セン</small> なり
コラフ、	ムカシ、	ハナル、	ヨロヅ、	カタシ、クルシム、	ホム、トナフ、

此の様に幾度音が變つても本義の動かないのは漢字の特色でありまして、今日吾々が五千年前の事物を明瞭に知ることの出来るのは誠に漢字の御蔭であります、其れですから自分は漢字の構造に就きましては多年研究を試みた譯であります。

支那で云ふ象形、指事と云ふこの二種の文は、丁度アルハベツトと同じものでして、此の二種の文が父母となつて、會意、諧聲と云ふ字を

産み出したのは誠によく「スベル」に似て居ります、其れが即ち諧聲が就中漢字の大多數を占めて居る所以であります、但横文字の諧聲は母字より發するものと左様でないものごとがありまして仲々入り込で居りますが、漢字のは誠に單純なもので僅か六つの規則の外何もむづかしいことはありません、

諧聲六種

諧聲六種

- 第一 左形右聲 江河の類(即ち左形の散水は義にして右聲の工、可は音聲を見はず所以なり。以下之に倣ふ)
- 第二 右形左聲 鳩鴿の類
- 第三 上形下聲 草藻の類
- 第四 上聲上形 婆娑の類
- 第五 外形内聲 圃囿の類
- 第六 外聲内形 問興の類

五千年來此便法を發見せざりしことを思ふ

焚書坑儒と支那文學の大打撃

斯様に正しい規則がありながら、諧聲を以て漢字を分類して教授するに云ふことに思ひ及ばなかつたのは誠に遺憾でした、責めて千年も前に早く此點に氣が付いたならば決して今日の非難は無いことと思ひます、今世界に於て音訓併用の國は獨り我邦あるのみで、支那の如きは縦文字でありながら又之を音讀するにも拘らず、教授することにも字引を作るにも、五千年來誰も諧聲に因て漢字を分類することには思ひ付かなかつたのは、吾々は寧ろ不思議に感ずるのであります、願ひまするに、彼の千古絶無と稱揚せられた所の、周代の文運も、秦の始皇の時に至りまして、一朝、書を焚き、儒を坑にしました、其結果は支那文學の發達に非常なる大打撃を與へたのは事實ですが、此事に就きまして二つの説があります、甲は李斯の小篆を沿ねく國中に用ひしむる爲であつたと云ひ、乙は儒者の反抗を防ぐ爲であつたと云

ふのでありますが、自分は乙の説を探ります、何故なれば如何ほど暴虐の政府でも、字體を一定する位のことの爲に、儒者を殺すと云ふは餘り非道すぎる、こんな事ではよもや無からうと思ひます、是はなんでも當時の儒者の風習として、年來己が攻究した學説と、今日の施政の方針とが若しも合はなかつた曉に於ては、生命を賭して迄も政治を論難すると云ふ意氣込みがあつて、政府も堪らないから已むを得ず、斯様な非常手段を遂行したものであらう、其れは姑らく措いて、此の大打撃以來世の中は次第に轉比例に退歩してしまつて、他日儒者よりも恐るべき暴徒が起りそうになつて來た、そこで諺にも政を爲ふは文にありとある通り、矢張り學問でなければ民は治められぬと云ふ事に氣が付き、學問の再興を圖りましたけれども、其時には肝腎の書物は疾くに焚かれ、僅に残つた本もあつたけれども、其本は皆篆

學問の再興

訓詁學の流行

體で書いてあるのみならず、既に音韻の變化があつたので、其を讀み分けることは仲々難しい、其所で訓詁學(古言の意義を解くこと)と云ふものが起つて、古本に註を付け始めた、字引としては爾雅の如き、説文解字の如き、玉篇の如き、字彙の如き、降つて康熙年間には、彼の有名な康熙字典が出版になりましたが、如何に當時の學者が、訓詁に苦心したかの形跡は、總ての字引に歴々として遺つて居ります、試に康熙字典で篇と云ふ字を引いて御覽なさい。

苦心の形跡、字引に歴々

- 篇 廣韻 芳連切 集韻 韻會 統延切 正韻 統連切 音偏 正韻 簡成章 也
- 前漢武帝紀 元光元年詔賢良咸以書對著之於篇 詩關雎疏 篇徧也 出情鋪事明而徧也 說文 關西謂榜曰篇 答掠也 又竹名 詩衛風 綠竹猗猗 傳 篇竹也 疏 似小藜赤莖節好生道旁可食 又 山名 山海經 洞庭山之首曰篇 遇之山 又姓 韻會 周太夫史篇

之後 字彙補 同韻古文易篇篇不富 以其鄰陸氏曰輕舉貌 又
叶批答切 道藏經 白帝行悉道當新名書紫府得其篇西龜定錄
位真人

斯様な工合に餘り訓詁の一點にのみ全力を注いだので、字引の組み立てと云ふことなどには頼んど考を持たなかつたのであらうと思はれます。其れ故か漢以後に於て種々の名稱の字引が出版になりましてたけれども、皆大同小異でありまして全く組み立ての變つたのは古來僅に三度であります。

(周代凡三千年前の出版)

一、爾雅

周 公著

事物分けにして文字の意義を説きたるもの後世之に註を加ふ

字引の變遷古來僅に三度

爾雅

(漢代凡二千年前の出版)

二、說文解字

許 慎著

意義分けにして文字の本義と篆體とを説きたるもの後世之に註を加ふ玉篇(梁代凡千五百年前の出版)は之に類せり

(明代凡七百年前の出版)

三、字彙

梅 膺 祚著

字體分けにして索引を主とし音訓を客としたるものなり康熙字典(清代凡二百五十年前の出版)は之に類せり

爾雅、說文は字義に精しと雖も索引に不便なり、字彙は索引に便なりと雖も、音訓雜駁なり。

以上三種の中、字彙體と云ふのが今多く世間に用ひられて居る、即ち康熙字典なども其一つでありますが、其れは索引の便利を主として

說文玉篇

字彙康熙字典

昔五百四
十字の索
引今二百
四十字に
縮まる

文字を無
理に辨め
込んだ證
據にはあ
る長い檢
字表

後世の字
引文字分
類を誤る

組立たものですから、説文解字の頃は、五百四十字であつた索引を、康熙字典では二百十四字に縮めた、丁度五分の二に縮めました、其の縮めただけ窮屈になりました、窮屈になつただけ文字を無理に辨込みました、其證據にはあの長い檢字表(引き悪い字を列擧したるもの)を添へねばならぬ様な始末になつたのであります、もう檢字表の厄介になる様な字は、なか／＼見付け悪い、やつと見付けた所で、なか／＼記憶し悪い文字ばかりです、のみならず、よく見ると部首の所に於て、部類の編入などにも少々誤がありはしまいかと思はれます。

字典說文

字彙體として
の自己の意見

說明

萬 音艸部
蔓 从艸
从内象形

内部に入る
とを可とす

萬

は象形文なり、上は則ち角の形なり、
艸の部に入るとは不可なり、
宜しく内(艸)の部に入るを可とす

失 音大
室 从手
从手乙聲

手部に入る
とを可とす

元來手に從ふ字なれば大の部よりは
手の部に入るを方穩なり

斃 音支
本 从支
从死敝聲

歹部に入る
とを可とす

斃の字を井の部に入れながら、獨り斃
を支の部に入れたるは一致せず、又
造字の精神より云ふも、歹(カゴ)の部
に入るを方穩當なり

烏 音火
汚 从鳥
鳥部象形

鳥部に入る
とを可とす

は象形文なり、下部は則ち其足に
象るなり、之を鳥の部に入れずし
て却て火の部に入る不常も亦甚
し

者 音老
赭 从白
从耂聲

白部に入る
とを可とす

は白に從ふ耂の聲とあり、耂は古
文の旅の字にして、耂の字にあら
ざれば自の部に入るを至常な
りと信ず

巢 音木
鄴 从木
从巛象形

木部に入る
とを可とす

象形文なれば木の部に入るを
可とす、之を川(カハ)の部に入れ
たるは不常なり

曼 音日 萬部

又部从又冒聲

又部に入る
とを可とす

上部は冒の字なり冒の字の冠は
曼なり之を日に混じたるは誤なり

章 音立 彰部

音部从音十

音部に入る
とを可とす

竟 音立 敬部

音部从音儿

音部に入る
とを可とす

樂曲の盡くるを竟となし樂竟を一
章となす音、十は即ち十の數の終
りなり二字共に音を意味するもの
なるに之を立の部に入る誤謬も亦
甚し

強 音弓 疆部

虫部从虫弘聲

虫部に入る
とを可とす

本義、虫の名なれば虫の部に入る
を可とす

協 音十 挾部

从十勑聲

力部に入る
とを可とす

三十人の力を合すると云ふ意義の字
なれば力の部に入る方穩なり

康熙字典の凡例に(前略)總在便於檢閱今乃依正字通次第分部間有偏
旁雖似而指事各殊者如𠄎字向收日部今載火部(中略)庶檢閱既便而義
有指歸不失古人製字之意と云ひながら、鳥を火の部に者を老の部に
萬を艸の部に竟章を立の部に編入したのは、著しい誤謬であります、

斯う云ふ
扁彼ア云
ふ扁

其他、字音に於て協の字の如き音、挾とありては却て記憶がしにくい
のです、何故、説文體に十に従ふ勑の聲としなかつたでありませうか、
加ふるに索引字母の音を悉く記憶なされて居る方は稀であります、
自分等始め多くは斯う云ふ扁彼ア云ふ扁と云ふて、音も知らずに只
形でばかり字を探して居るではありませんか、索引字母の音をも知
らせずに、字を引けなごう云ふのは餘り迂遠な教へ方ではありませ
んか。

振假名
の杜撰

以上は支那字引の事でありますが、殊に日本字引の振假名の杜撰な
ること、其れは非道いものです、本字の左右に音を付けて其下に幾つ
ともなく訓を並べてある、此訓の時は此音、此音の時は此意義と云ふ
様な説明のなかつたのは、實に不規律と申しませうか、不體裁と申し
ませうか。

序でに御注意を願ひたいのは誤置文字の事であり、素と文と文との組合はせ、文と字との組合はせ、字と字との組合はせで出来た文字でありますから、一本の棒でも一つの點でもなかく、大切であるのです。之を間違へたならば文字にはならない、随て正しい音が出てこないのみならず、其の爲めに飛んだ間違を起した例はいくらもあります。支那で有名な書家の王羲之の趙子昂など云ふ先生達ですら、随分誤置の文字を書いて居る位ですから、段々其れが芽が出たり蔓が延びたりして、今日では讀本にも手本にも誤置の文字が澤山混つて居ります。此誤置の文字の混つて居る讀本、だの手本だのを其儘學校では生徒に教へますから、生徒の頭が初めから滅茶々に教へこまれて仕舞ふのです。是は字引を改造すると同時に是非改めねばなりません。

讀本にも
手本にも
誤置の文
字

もう一つ御注意を願ひたいのは、熟語の事です。古は一字必らず一音一義であつたのですから、同意義の字が二字以上出来べき筈がないのですが、あの廣い支那がまだ封建制度で交通不便であつた時代では、勢、東西南北到る處皆其の發音を異にして居りまして、果ては物の名稱より文字の使ひ方までが違ひました。他日中央政府が出来て布告や命令を出すのに、一方に通ずるものは他方に通じないと云ふ様な不便は毎度起つたので、已むを得ず双方の用ふる所の同意義の字と字とを聯結して、ごちらから見ても分る様にしたのが熟語の起因であります。試に説文解字の註を二三列舉すれば斯うなつて居ます。

- | | |
|----------|----------|
| 恥 (辱なり) | 辱 (恥なり) |
| 逍 (一遙なり) | 遙 (逍一なり) |
| 遯 (一遁なり) | 遁 (遯一なり) |

(即ち恥辱と云ふ熟語をなせる所以なり)

警 (戒なり)

戒 (警なり)

訊 (問なり)

問 (訊なり)

寄 (託なり)

託 (寄なり)

橋 (水梁なり)

梁 (水橋なり)

酪 (一酌なり)

酌 (酪一なり)

遠 (遠なり)

遠 (遠なり)

本來でしたならば、一つの言語は一つの字で足る譯ですから、成べく一字で事の分る様にしたい、なせと申しますれば文句が短くなつて、そうして却て分りよいのですから強いて長くするに及びません、然るに何んでも四角張つた字を二つ重ねれば直ぐに熟語になると云ふ様な、心得違ひを世間ではしては居りますまいか、殊に近年は怪しい新熟語が大分殖えて、熟語の性質を滅茶々々にして仕舞つた様で

新熟語

吾々の子孫に斯様な悪例は残したくない

す、ごうも吾々の子孫には、斯様な悪例は残してやりたくはないと思ひます、昔の熟語は規則正しく出来ただけに、五千年後の今日でも能く分りますけれども、不規律に出来る今日の新熟語は、五千年五百年は愚、五十年後の子孫をして大に困らせることになりませう、全く文學の上に毒を流すことになりませう、字引の改造と同時に此弊をも矯正せねばなりません。

さて讀書百遍義自ら通すと云ふ様な、悠長なる教へ方や、六書を措いて四書五經を讀ましたと云ふ様な、倒さまな教へ方の不可ないことは勿論ですが、試に今一冊の讀本を繕いて御覽なさい、而「如」其「此」然「以」彼「是」之「夫」と云ふ様な字は、見飽きる程書いてあります、其反對に容易に見當らない字がある、讀本として餘儀ない次第であります、うけれども、其では文字の教へ方が不平均になります、而も新たに一字

試に一冊の讀本を繕いて御覽なさい

無理もない苦情

を讀むと同時に、音訓、句讀、訓點、字義、字畫、文法より、全體の文意、文章、要點までを一時に記憶せねばならんから、骨が折れますし、随つて覺え悪いと云ふが、議論の燒點になつて居ります。是は無理もない苦情です。すから、或意味に於ける讀本體の字引を作り、異なる文字を片端から萬遍なく讀ませ、傍ら六書の義を添へて教へたならば、此不平均は容易しく補ふことが出來ます。

私の理想は既に五十音の假名の讀めるものは、五十音の假名で綴つたものは、どんな文章でも自在に讀み得ると同様に、漢字の諧聲を習ふたものは、漢字で綴つた書物の音讀は、どんな文章でも讀める點にまで進めたい。而して教師は、唯意義、文法を説くと云ふ様にしました。ならば、時間の經濟、記憶の容易、それは、教授上、相互の便利は、非常なものでありませう。

漢文の音が自然に出來る點にまで進めたい

諧聲は字音を助ける

諧聲を教ふることは、字音の記憶を助くる上に於て確かに効のあることで、六書の本義から教へると云ふことは、文字の根源を知らしめ、併せて訓讀の記憶を助くることになり、象形、又は何の字と何の字との組み合わせであると云ふ様に字を分拆して教へることは、字畫を記憶せしむるに便利であると同時に、文字の誤畫を正すことは其副産物として出來ます。

諧聲要覽の摘録

以上の理想を以て自分が此度組立てました。漢字諧聲要覽と題します。字畫の一部を摘録致しますれば、此様な工合になります。

土部

土 地の生物を吐くものなり。二は地の上、地の中、一は物の出づる形に象るなり。

(音訓は茲には省略せり以下之に倣ふ)

吐 瀉ゴなり口に從ふ土の聲

徒 歩行するなり走に從ふ土の聲

杜 甘棠なり木に從ふ土の聲

塗 泥なり塗に從ふ土の聲

才 部

才 草木の初なり一上を一を貫き將に枝葉を生せんとするに從ふ一

は地なり

材 木ゴ榘なり木の勁ツヨクくして用に堪ふるもの木に從ふ才の聲

杜 居スミなり土に從ふ才の聲(今は在に作る)

財 人の寶とする所なり貝に從ふ才の聲

豺 狼の屬なり豸に從ふ才の聲

夫 部

夫 丈夫なり大に從ふ一は以て簪に象るなり周制八寸を以て尺と

なし十尺を丈となす人の長け八尺故に丈夫と云ふ

扶 佐タくるなり手に從ふ夫の聲

芙 芙蓉なり艸に從ふ夫の聲

麩 小麥の屑クソ皮なり麥に從ふ夫の聲

世 部

世 三十年を一世となす卅に從ふ而して長く之を曳く亦其聲を取
るなり

泄 川の名なり水に從ふ世の聲

賈 貸なり貝に從ふ世の聲

昏 部

昏 日の冥タくなりしなり氏ウヂの省に從ふ氏は下なり

婚、^{アキラカ}懐ならざるなり心に従ふ昏の聲

婦の嫁するなり女に従ひ昏に従ふ昏も亦聲婦人は陰なる故に
婦を娶るに昏時を以てす

若し在來の字引が文字を側面より見たるものとすれば、私の諧聲要
覽は之を正面より見たので、要するに諧聲を以て記憶に便ならしめ
んとするにあるのです、故に之を一部の字引と見るも宜しく、又一部
の讀本と見るも宜しく、適宜に之を分割して小學時代の生徒よりし
て教へたい考へであります。

漢字の諧聲は「丁度スペル」と同じいものである以上は、普通讀本の傍
ら之を習はしたならば教授上少からず利益のあることと思ひます、
年來漢字には覚え悪いと云ふ遺憾がありましたけれども、今後、諧聲
分類によりて文字を記憶する便法を探れば、左程の腦力と時間とを

文字を正
面より見
た字引

費さずして容易に覚えらるゝことゝ確信いたします。

さてまた漢字の諧聲は、偏旁の異なるに随ひまして時としては變化
することがあります、且漢音、吳音、楚音等の變遷があります、其變化
の唇齒喉舌に基づくことは勿論ですが、概して五十音の行と段とに
由て居りますことは、丁度、速記字や朝鮮の假名字の通りでありまし
て、又羅馬字が母字に由て發音に變化のあるのにも善く似て居りま
す、例へば、

漢字の音
と五十音
との關係

(漢字) (右の假名は漢音にして左は吳音なり)

即ちアカサタナハマヤヲの段にて
サイタイ 我が或に變じたるなり以下之に倣ふ

千	區	品	裁	千	區	臨	戴
千	區	品	裁	千	區	臨	戴

アの段の變化
イの段の變化
ウの段の變化
エの段の變化

公^ア亞^カ甘^ニ七^シ竹^チ内^チ白^{ハク}待^{タイ}米^{マイ}夜^ヤ力^{リキ}因^{イン}
 翁^ウ惡^ア紕^キ切^キ篤^{トク}納^{ナク}百^{ハク}迷^{マイ}液^{エキ}肋^{リキ}恩^{オン}

- オの段の變化
- ア行の變化(即ちアイウエオの行にてアが惡ウに變じたるなり以下之に倣ふ)
- カ行の變化
- サ行の變化
- タ行の變化
- ナ行の變化
- ハ行の變化
- マ行の變化
- ヤ行の變化
- ラ行の變化
- ワ行の變化

キ

ク

(漢記字)	「	(一と「の合體)	」	(一と」の合體)
(朝鮮の假名)	ㄱ	(ㄱと「の省體)	ㄷ	(ㄷと」の省體)
(羅馬字)	Ki	(ケと「の綴)	KU	(ケと」の綴)

縦文字と横文字とは字體こそ異なれ、字の配合から音の變化まで、こゝんなに善く似て居ります。

漢字は五千年の間一定の原則と規律とを以て行はれ、其特長は字毎に必ず一の意義を含んで居る點であります、近頃世間に縦文字と横文字との得失論もある様ですが、凡て物には一利一害の伴ひ易きものですから、よくよく熟考の上、取捨撰擇せんければなりません、今試みに双方の得失を挙げますと、

漢字の特長は上來述べました通り、第一字音變ずるとも本義の萬世不易なること、第二諧聲同じくとも字の形に因て意義の異なること

漢字の特長

横文字

例へば「裁」「裁」の如く、木に従ふものは栽培の裁となり、衣に従ふものは裁縫の裁となり、車に従ふものは搭載の載となる類、此所が即ち形と音と義とが複本位式に働いて居る點であつて、音だけで意義までを記憶せねばならん字よりは遙に容易キヤスいのみならず、此所が文字としての價值のある所、又、高尙なる點でありますが、横文字は素より假名の如き字ですから、字其物に何んの意義もなく、全く單本位式であります、既に字に意義がなければこそ、横文字には註も疏も註への又、細註を云ふ振假名も要イらないことになるのです、假名字計りを用ふる國の人の頭には本字と云ふ觀念は無いでせうし、随つて本字に假名を付けると云ふ様なことは不思議に思ふでせう、古代の漢文は全く韻語(音調を正して作りたるもの)でありまして、韻を踏んで綴り、詩は又、平仄(四聲のこと)を正して作られてありまし

韻文

詩

漢文は餘り短く横文字は餘り長い

て、而も簡にして高尙優美なる點は、漢文の特色であります、横文字の文句に此味を持たせることは容易に出来ませうか、漢文は短か過ぎる程短かく、横文字は長過ぎる程長い、横文字の書物は概して大冊である、議論も長いでせうが、議論の長い割合よりも綴りが長過ぎるのでありはしますまいか、綴りの長くなるのは、すべて假名字の不便とする所ですから、今漢字を廢して羅馬字に代へ様と云ふ様な説は、實際に行はれませうか、餘程考へものと思はれます、漢字は畫が多いとか、字數が多いとか云ふ議論もありませんけれども、漢字は煩雜の様に見えて却て簡單であります、(散水)に従ふ字は、其初め一つの川の名毎に一文字づく作られたのであると云ふ様なことは、思ひ半ばに過ぎるだらうと思ひます、川の字、山の字の如きは各僅に三畫に過ぎない、之を羅馬字に綴ると、

川の字、山の字、僅に三畫

KAWA (かゝ) YAMA (やま)

横文字の
長所

若干の字を合せて始めて一の川となり、一の山の字となるのですから、畫の上より云ふと横文字の方は餘程畫が多くなる譯です、唯書きよいと云ふことゝ印刷に輕便なる點は横文字の長所でせう、併し此位の便利の爲に、五千年來東洋に用ひ來つた漢字をば一朝捨て、横文字に移らねばならんと云ふ必要が目前に迫りませうか、これはチト疑はれます、要するに漢字の長所は字に意義を含んでると云ふ點で、横文字の長所は印刷しよいと云ふ點で、二者の優劣は宜しく識者の判断を俟て決すべき問題であるにも拘らず、今俄に漢字を捨て、他に移らうと云ふのは、大早計ではありますまいか、昔時ナポレオン一世が儒臣に命じて、康熙字典を翻譯させた時に、支那文學の發達に驚いたと云ふが如き、先年英人「ハーポルト、エー、ジアイルス」氏が

大早計
「ナポレ
オン」一
世と康熙
字典

縦文字が
横文字に
譯される
と云ふ機
運に向ふ

康熙字典を英譯しましたるが如き、近年日本倫理原論が「チェンバーレ」氏の手に因て英譯されましたるが如き、此所五七年は戰捷の餘光より、西洋人にして東洋文學を研究するものが大分殖えて來た様です、從來は概して横文字が縦文字に譯されましたが、今度は倒まに縦文字が横文字に譯されると云ふ機運に向つて參りました、漢字は實に東洋の文華を世界に紹介する唯一の道具でありますから、此際、字引を改造して、西洋人に迄も漢字を學び易い様に便利を與へることは、目下の急務と信するのであります、遂近頃の事ですが、第五高等學校の教授「マードック」氏の如きは、日本文を調べるにどうしても漢字を一應調べねばならぬので、矢張この諧聲の法で漢字を讀んで、僅々一ヶ年半で今ではどんな漢文でも讀み得、又、どんな漢文でもさつさと作りますさうです、誠に足下から鳥が立つ様な話で、マゴ〜し

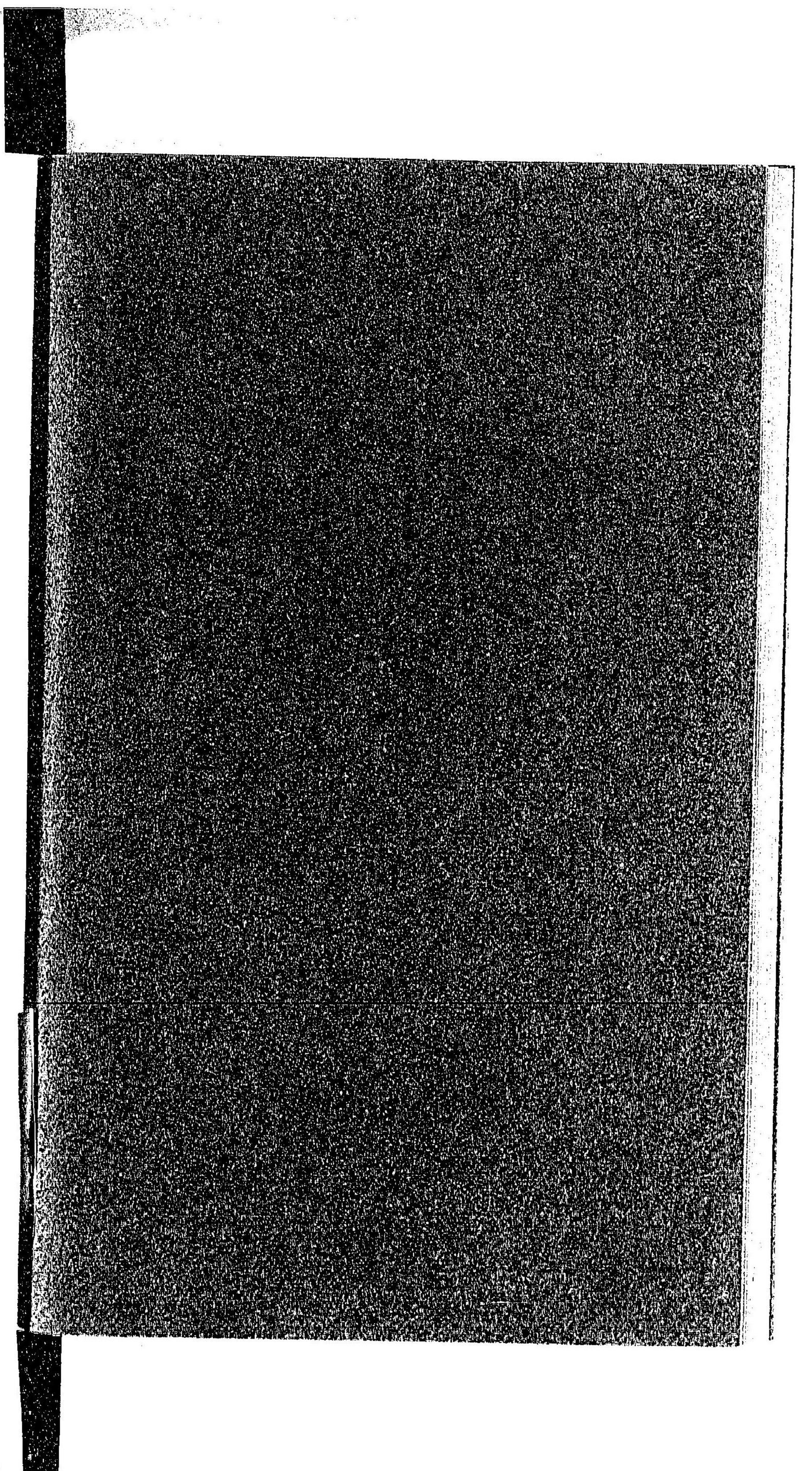
足下から

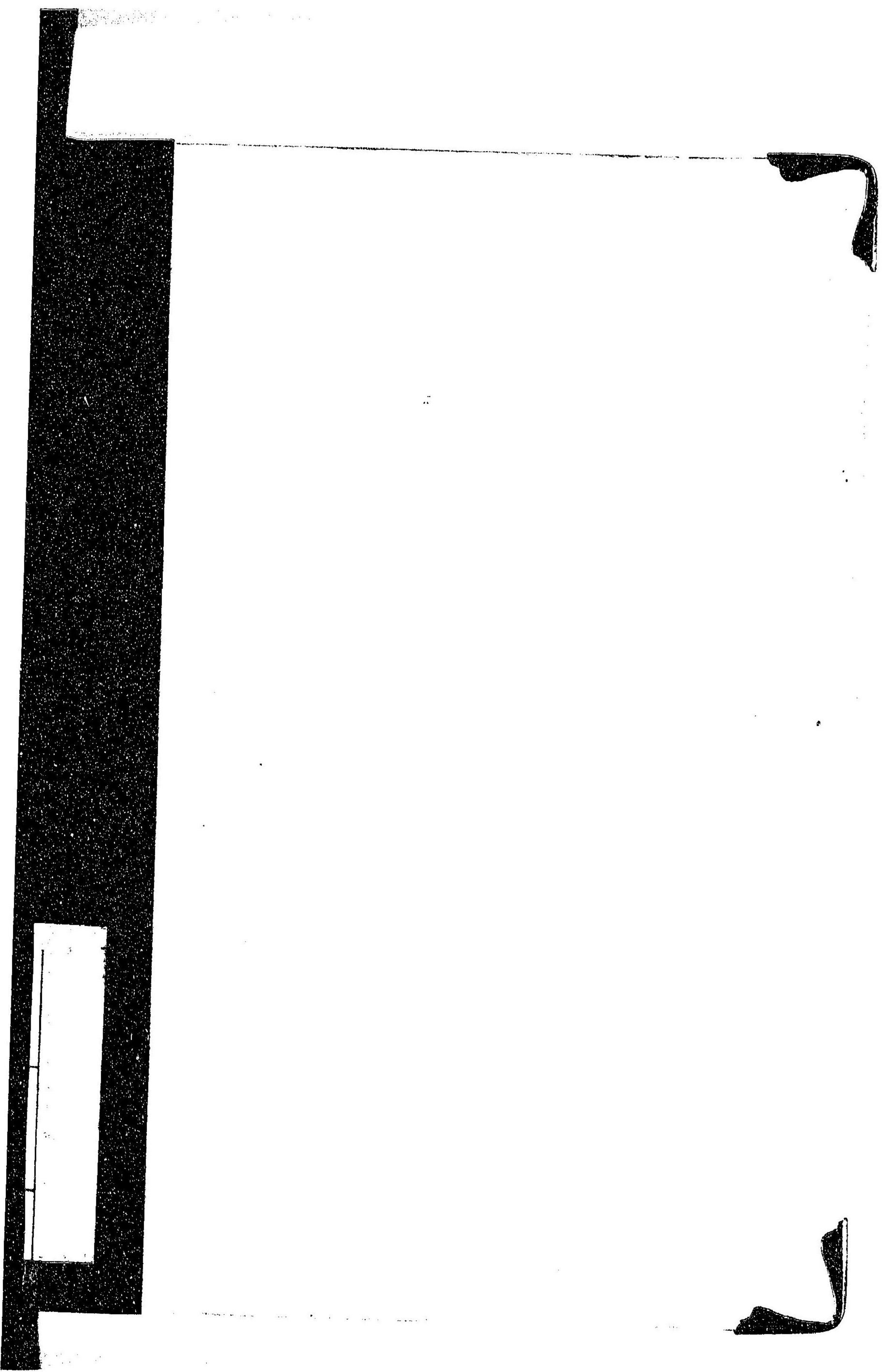
島が立つ
機な話

て居ると、西洋人側からあべこべに日本人が漢字を教そはらねばな
らん様になります。

三六

(清水俊次速記)





811.2

Ko.518k

漢 字

国立国会図書館

077094-000-5

811.2-Ko518k

漢字

小金沢 久吉 / 述

[M40?]

DAC-0279

